昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十五年三月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第二十二巻　第三号
（通第二五〇号）

63.7.28

目次

◎人生問題と信仰……近角常観……(1)
親子一如……福島政雄……(9)
歎異抄の愚考(一)……杉藤美代子……(14)
『癌の宣告の可否論』……花田正夫……(19)

人生問題と信仰

近角常観

人生とは吾人眼前の事実である。この人生をしっかりと見ずに、ごく表面的に看過（かんか）したならば、その意味を少しもわからずに、ただいたずらに食い、いたずらに寝て生涯を送るに過ぎぬであろう。

さりながら、この人生を深く見る眼をもって見たならばこの人生には味わうだけ、深い意義が横たわっているのである。この人生を太古から今に至るまで、広く世界中のものがみなことごとく、日夜に経験してきたが、その中で古の聖賢哲人と、その他の凡人と、大なる相違が出来たのは、この人生を深く徹底してみたと否とによるのであるが、この人生は何人も日夜眼前に見るものである。そのこれを取って問題にする人の心と、これを見る人の眼孔の次第で、どれだけでも深い問題となるのである、そしてその結果は如何といえば、深く見、深く経験した最後に、その根底にまで達する時、そこに最後の光に触れて、はじめて人生根本の大なる意義を見出すにいたる。かくの如く凡人の眼に映じただけの人生でなくて、確乎たる地盤の上に動かざる根柢を据えてきたところを、宗教の言葉では信仰というのである。

なお解（わか）り易くいえば、人生とは深く見ればいくらでも深く見られるから、その人々の勝手次第に、如何ようにも色がつくというのではない。勿論見る人の眼次第でこの人生を楽しいところとも見るであろう、悲しいところとも見るであろう、十人十色の見分けがあるのであろうが、それからは一応この人生を考えたはじめの階級に過ぎぬのであってそれを通りぬけて絶対の地盤まで行くと、単に主観的でなく、真実に最後の光を見ることとなる。

その信仰の地盤に立ってこの人生に処するときは、人生はすこぶる確乎たる意義を有して来る。このように人生を深くうがって信仰の光を見出して、この信仰の光をもって人生を照らして働いて行く、これがそもそも吾人が世に処する根本意義である。

ところがそれが容易なようであって、実は決して容易でない。世人がこの人生を考えても、未だその地盤まで達せずに中途に考を止めておくから、或ものはこの人生に対して悲哀の感をいだき、或ものはこの人生を無秩序の境と思うなど、種々の見方が分れるのであって、これらの人は平凡のものの酔生夢死するとはことなって、この人生を問題として考えておることは考えておるけれども、ただいたずらに考えるのみで、或は左に、或は右に、自分勝手にきめつけて考えておるまでであるから、いろいろもがいても、遂にその要領を得ず、煩悶の状態におちいり、真の根底まで達せずに終わるのである。

一言に人生問題と云うてもその問題は実に沢山なことで精神上の煩悶も人生問題であれば、経済上の問題も人生問題である。人情のために苦しむのも人生問題であれば、義理のために苦しむのも人生問題である。また理想を作ってそれを実現しようとして苦しむのもそれであるし、正義人道を厳粛に行わんとして苦しむのもそれである。財産上の問題のために苦慮した結果、社会主義を唱えるに至ったのもやはりそれである。世間によくあることで嫁と姑との折合わぬのも、ちょっと考えれば、人生問題等と云えぬようであるが、実は家庭問題として大なる問題であって、人生問題としては、国際問題の紛糾と同じ価値である。

かくの如く人生に関する大小百般の問題について、何処からでも究（きわ）めていって根底にまで達したならば、遂に信仰に帰結する。たとえば地を掘りて水を求むるが如くで、右からでも左からでも、遠くからでも、近くからでも、手を下だして掘って行って止まないならば、最後に水層を掘りあてて同じ清水を得るが如く、人生問題の何れからでも究めて行けば、遂に信仰の水に掘り当たるのである。そういう風に人生問題のいずれからでも究めて行けば、遂には同じ信仰に達するが、その未だ根底に達せない前においていろいろと見解を立てて見ても、この問題は真の解決が出来るはずはない。現代世間一般にいろいろと人生問題が起こるは起こっているが、いまだ最終帰結のあらわれておらぬのは、この帰結が信仰の一点にあることに気附かぬからのことであります。

近頃（明治三十九年）日本の思想界がすこぶる混乱をきわめておる。否、近頃ではない、前々からこの気運があったが、ことに近時世上に著しくあらわれてきて、実に一世の問題となったのである。先頃の文部大臣の訓令は今日の時代精神を代表したものと云ってよいと思う。他人心ありて我これを忖度（そんたく）すというべき有様であったか

ら、一世こぞってこれに賛成の意を表しておる。私も大臣の志の親切にして、その考察の真面目なのに大敬意を表するものである。しかしこれは一世の憂うるところを、大臣が代表して問題に作りて社会に問うたというまでで、即ち宿題提出の声であります。その解決を与えたのではない。

この如く日本の思想界は、この人生問題をば問題にはしたが、これが解決をよくすることが出来るかどうか。もっともこれに対する答案も沢山出ておるようだが、どうも最後の絶対の地盤まで探りあてて解答を下だしたものは甚だすくないと思われる。現に一世こぞってかくの如きの問題に接しながら、これに対する真の解答を得ぬのはまことに惜しむべきことである。

さてその現代の思想界の問題はどういう問題であるかというと、これこれであると数えたてて云うことは出来ぬ。勿論文部大臣も漠然と近頃何々なりと聞くという風に云うておられるが、要するに新聞紙上にあらわれた通り、第一に世人がだんだんと悲観におもむいて来る、真面目の人が煩悶する。その悲観の原因は勿論同情を表すべきものばかりとはみえぬが、中には高き理想を持っておりながらも、実際には自分の信ずる通りに行うことが出来ぬために煩悶におちいったものがたしかにある。又多数の中にはわざと煩悶をよそおう弊（へい）もなきにしもあらずだから、皆がみなまで真面目な煩悶者とも云われまいが、いやしくも命を捨てるという程のものが不真面目なものばかりとは決して云われない。もっとも未だ信仰に入らぬ前の生活は、普通から云うてあまり感心せぬこともあろうが、とにかくその人は真面目である。性質真面目であるから、道徳上とか人情上とかについて煩悶を持ち来たすのである。又近頃は人が柔弱に流れてきたというも、青年や学生が随落したというも、又一歩進んで極端な社会主義を唱えるとか、或は悲哀な文学があらわれたとかいうも、皆これ現代において著しくあらわれたる現象である。

これらの諸現象はその源をたずねれば余り遠くなく、いずれもこの人生に真の光が出ぬために、ついに内にうつして煩悶となり、外に溢れて社会平等を叫ぶこととなり、しおれては自殺を企て、破れては犯罪ともなるのである。文学とてもその通りで、いかに人情をうつすのが文学であっても、徒らに煩悶をうつすばかりで、人生に光を与えぬならば無用の文学である。著者自ら人生の真の意義を見出した上から筆を執ったのでなければ、真の文学の価値はない。哲学も文学と同様であって、真に真面目なること古のギリシヤの哲人達の如く、その他古聖賢哲の思想の如く、人生の灯明となるべき思想が哲学であるが、これに反する

今日の哲学の如き、単に理屈ばかり云うておるのは真の哲学でない。その他、法律であれ、国家の秩序であれ、道徳倫理であれ、真にそれを考えて行くならば、絶対の地盤にいたる筈のものであって、未だ真の根底を見出し得ぬならば、未だ真実の解決がないと云うべきである。

結局、人生問題は信仰にいたって解決がつくのであって私は現代の如き思想界を救うには信仰に限ると断言する。ことに今ここに力強く言いたいのは、現時すべての人が人生問題の解決は、信仰に帰着するという点に気付かぬ一事である。世の先進者と称するものは深き同情をもって、この不祥の潮流を救済しようとはせずして、徒らに姑息（こそく）の手段を云々し、いまだ信仰をもって救済すべしということに気付かず、又実際煩悶しておるものは、なおさらその煩悶が信仰によって解けるということを知らぬために、遂に死に走るにいたる。もし信仰によって帰結がつくということを知らしめたならば、必ず多くの人が救われるであろう。しかるに人生と信仰を関連せしめて、人生問題の帰結が信仰にありということに気付かぬから、いっまでも解決の法が見出せぬのであります。

信仰ということは何人も云うておるが、その信仰なるものは、最も古き問題であって、又実に新しき問題である。信仰には新信仰とか、旧信仰とかいうことがあるものでない。又自己発見の宗教というが如き珍しい産物が出来るものでない。信仰は千古万古かわらざる問題で、又未来永劫同じように変らぬ問題である。だからいっ見ても新しい生きた問題が信仰問題である。

ところがその信仰問題に関する一つの弊を云えば、古来の宗教は極めて古くありて、しかも今の我身にとりて極めて新しいということをさとらずに、説くものは徒らに説き、聞くものは徒らに聞くという点である。むかしは血書の写経というものがある、これはその人が信仰の上から、生ける血をもって神聖の文字を写したものである。それを今時の人は空しく古物珍蔵（こぶつちんぞう）としてながめるに止まり、生ける血をもって書いた精神に気付かぬのが多い。それと同じく古の聖賢の書いた宗教は、人生の生ける血をもって書いたものである。すなわち釈尊なり親鸞聖人なりが、生きた人生を経験して、生きた血をもって書いた信仰である。しかるを後世にこれら聖賢の道を伝えるものは、生きた血をもって書いたものとながめておるかどうか。墨痕（すみあと）の美しい珍蔵すべきものであるとか、若しくは古人は如何にも感心なものであるくらいのところに止まりて、その古聖賢の生血が、すなわち我身の血管を今現にめぐりつっある生きた血であると気付かぬでは

あるまいか。生きた血が黒くなりて高閣の上につかねられた一つの古き書物であると同じように、信仰問題も死物になりておるならば、人生の間に合わぬはあやしむに足らぬことである。

大聖釈尊がこの人生に仏陀の光を持ち来たされた。しかるをその仏を現時、多くの人は木か金の仏像の如く考えている。法然上人が心血を注いで唱え出された南無阿弥陀仏は、真に一生の生命である。しかるを今日これを唱えるものは、この念仏を以てすこぶる物淋しきもの、この人生を離れたるものの如くに思うておる。すべて古きところのものはまた最も新しきものであるという、この「新しき」という方面が分かっておらぬ。それゆえ現に信仰を説きながらすこしも人生に関していない。実に残念でたまらない。

つい先日、大阪へ行って彼地の新聞を見たところが、煩悶者、自殺者、犯罪者、これらの悪現象が満紙にのせられてある。日本の中では東京よりもなお煩悶状態におちいっているのは大阪である。こんなところゆえ、宗教等はちっともないところであろうと思うと、何ぞ図らん大阪には、堂々たる東西両本願寺の別院があって、実に非常に広壮な建物である。かく一度は彼地の社会の煩悶を見て驚き、二たび大なる殿堂を見て驚いた。しかもその殿堂が、奈良に遊んで見るところの古色蒼然、中世上世の面影を残してある如き堂塔、仏閣に非ずして、毎日説教の絶間なく、参詣の人も堂に満ちておる。一方には広壮な殿堂がありて毎日説教が行われておりながら、他の一方には大に煩悶を極めておる、実にあやしむべきことではないか。

これは何故かと云えば、つまるところ、その説くところの信仰が直にこの生きた人生に触れずに、別に一区劃（いちくかく）を為して、専問的に説かれ、閑事業の如く、社会一部の人に聴かれてあるばかりで、絶えて現代思潮の中心に向って信仰が出ておらぬからである。宗教が人生の問題でないなら致し方はなけれど、千古万古新しいものでありながら、それが新しき人にとどかぬのは実に遺憾千万である。

ゲーテはこういうことを云うておる「人類は進歩するが人間は少しも進歩せぬ」と。いかにも蒸気電気等の発明のために世界は進歩したに相違ないが、打てば痛く、死を思えば淋しく感ずるところのこの人間というものは、古今同一である。そうであれば、その人生を解決するところの信仰も千古同じであるのは勿論である。それでは何故にその信仰が生きておらぬかというに、その信仰の味を人生そのものより直接に味わわずしてただむかしのままを形式的にことば通りに云うばかりであるからである。釈尊や法然、

親鸞等の方々が、人生を経験された如く、自分自身が人生の上に経験して味わった信仰でない。つまり新しい酒を新しき瓶の中に盛りかえずして、古瓶のままで持って来ておるからである。即ち信仰を新しい人生の上に味わわぬからである。もし新しい人生に持ちきたって味わったならば、何時でも古聖賢の味わった通り味わえるのであるから、どうかそういう風に古来の信仰を今時の人に味わわしたいものである。

さてまた一方には、宗教上、信仰上に新しい思想を持ってかかっておるものもある。しかしこの新しいと云うておる側は、はたして宗教の問題としてその要を得ておるかと云えば、惜しいかな、否と云わねばならぬ。彼等はまだ絶対の光を見ておらぬ。つまりその人達が宗教問題と云おうが、信仰問題と云おうが、やはり普通の人生問題と同じ地位に止まっている。これらの人は新しき信仰を案じ出し、新しき宗教を作り得べしという空想に止まっておる。信仰は千古ふるいものが常に新しいという事実に気付かぬのである。いかに新しく説いても、真の絶対の光に達し来って信仰を説かなんだならば、到底人生を救うところのものにはならぬ。

要するに人生と信仰との関係は、先ず人生問題より進んで信仰に達し、しかして信仰によりて人生問題を解くというのが、今私の述べんとするところである。しかしこれは何も私一人が知ったように云うのではない。勿論、古往今来つねに然りである。けれども現時このことを論じておる人のすべてが、皆新経験をもって云っておるとは許されぬ。古来宗教をもって人生を救うて来たから、今後もその通りでなければならぬというだけで、自分が宗教の光を見た上で人生に活動するのでないならば駄目である。

そもそも人生から光を見出だすの考は、日本だけの思潮でなく、実に一世の問題である。十九世紀から二十世紀にかけての西洋の傾向も、実にこの如くである。西洋の文学も経済も歴史も倫理も実にこの如き傾向におもむいておる。いずれも人生の生きた問題に触れて説を立てんとしておるが、一般の風潮である。現にトルストイ氏の非常に西洋で持てはやされるのは何かと云えば、人生から穿（うが）って行ってもって一代を導かんとするところが、一種異彩を放っておるからである。このような傾向をしばらく一世の言辞によって、これを自覚問題と名付けよう。

考えて来れば両三年の思想の潮流は、この自覚の問題に点火して来た。所謂「無我の愛」とか、「見神（けんしん）の実験」とかいう風の問題である。近頃沢山に自称神仏な

どいうものがあらわれたが、他のは例に引くほどでないが、伊藤証信とか綱島梁川とかいう人は、真面目に自分の所思を発表したのである。もう一っ云うならば私等も見神の実験とならべ立てて、見仏の実験を説くのであるなどと云われてあるが、これは誤れる批評である。さりながら私はかの二氏に対しては世人以上に同情をもってながめることが出来る。一言に言えば、実験であるということにおいては、大いに注意すべき現象と私は見るのである。

この如くして人生から穿って信仰に行かねば駄目であることはすでに明らかになった。即ち何にても自分の苦しむことからして究めて行って、直に信仰に入るのである。その問題の何たるにかかわらず、或は道徳、或は欲望、或は人情の薄きこと、或ば世の無常なること、何事にても人生の極に達して遂に最後の光に達するのである。かくの如き相対の事物から、進んで絶対の光明に触れるということは宗教の常であって、禅宗の方で「如何なるか是れ仏、答曰麻三斤（まさんぎん）」。或は「如何なるか是れ仏、前庭の柏樹子（はくじゅし）」などいうも恐らくはこうであろうと思う。とにかく人生の何事からでも導かれて、遂に信仰に入れるということを、私の実験の上から話しておるのが私の平生であります。

これに加えて今ここにこの如き問題を出したについては更になお一つの意味がある。それは前に述べた如く人生問題を叩いて絶対の光明に入るのであるが、さてそれが入っただけで終るのでない、その絶対の光でかえって人生を照らして行くということがもっとも必要であって、これがまた容易なようで実に大いに容易でない。このことも近時、世人がしきりに論じておるが、それにしても多くは人生から信仰に入ったのでなくして、信仰から強いて人生をうまくやって行こうというので、つまり信仰の味がよく分かっておらぬのである。

今私の言うところは、いわゆる「山に入りて、復（また）山を出ず」というが如き意味で云うのである。一例を以て云えば、政治問題も単に政治問題に止まりて、中心信仰が無いならば、真の政治が出来るものでない。政治問題を穿って行けば結局信仰に入るべきであり、その信仰の地盤に立って政治をなす時に、はじめて真の政治を見ることが出来るのである。若し真の信仰がなくして、ただ宗教の上から政治を為さざるべからずというならば、これは宗教を利用して政治を為すというに過ぎぬ。又一方から宗教は政治によらねばならぬというのも同じことで、その云うところの意味を露骨に云えは、宗教の勢力を張らんがために政治の力を借るというにすぎぬ。このように政治家は宗教を利

用せんとし、宗教者は政治を利用せんとするのは、何れもすこぶる不真面目な料見であって、断じて宗教の真義を味わわぬもののことである。

こんな意味からして信仰を以て人生に働くというのならば、それはあだかも前に論じたる人生の方面に出ることのない宗教と同じく、如何にしても遂には無用に帰し、徒労に終ることである。

要するに真実に人生を自覚したる上において、再び人生に活動し来るのでなければ、人生に真の味わいが出て来るものでない。のみならず、たとえ人生を穿って信仰に達するというても、真の信仰でなけねば再び人生に出て来られぬ。彼の「無我の愛」は何故倒れたかと云えば、人生の方面より進んで絶対の信仰に入りたが、その絶対から今度相対の人生に出られぬところで倒れたのである。いわゆる最後の光が人生の上に光をあらわし得ぬのである。こういうことは古来から例のあることで、これを宗教の古い言葉でいえは「七地沈空（しちぢちんくう）」とか、「声聞実際を証す」とか云うので、すべて遁世的（とんせいてき）気風におちいるのは皆これである。これは実を云えば信仰から人生に出られぬのでなくして、人生から信仰に達し足らぬのである。到りおわれば絶対ゆえ、何時でも相対界に出られぬ筈はないのであるが、それが出られぬというのは、その人自身ではたとえ絶対というていても、なお真の絶対に到達し得ざる相対的信仰をつかまえたのであるからであります。これに反して今日の社会主義は、人生問題の上に立ってしきりに苦しんで、しかもその人生の方で倒れたのである。彼等もなお進んで絶対の上に立つまでになったならば、大いに見るべきものがあるであろう。

要するに、全く信仰の上に立つたならば、かって信仰に入る道となったあらゆる問題が皆解決が出来る。即ち信仰で政治を為し、信仰で社会の問題を解き、信仰で道徳を守るにいたるのである。惜しいかな今日多くの人生問題が、どうも信仰に達しておらぬから、たまたま人ありて真面目に人生問題について苦悶を訴えても、ただ漫然と人生を愛せよと答えて終ることとなるのであります。

以上述べた如く、今日の時代は人生問題から信仰に到る道行きである。この道行きにおいて、或は悲観におちいり或は無秩序に流れんとすることは如何にも不祥の事である。さりながら、それらよりして遂に信仰に入りて、然る後に人生問題に出て来るべきことは、私の深く信ずるところであって、世人が何人でも一度信仰に入り了れば、何時でもこの信仰よりして人生に活動することを得るものである。しかしてこの如く信仰より出でて大いに人生に働かんとするが、吾人の希望である。云々。（人生と信仰）

親子一如

福島政雄

信仰の上のお話を申述べます時、その時の調子に乗って自分の達しても居ない境涯を述べることが往々にしてあります。立派なことを申しても自分の境涯はそこまで往っていないのであとで後悔をしますのであります。

今はまた阿闍世王のことを述べます。一体阿闍世王のような立場、またそういう性格に自分というものが少しでも通うところがあるのかと考えさせられます。

阿闍世王の事を述べますについて実は私の父親の思い出ぎ深いのであります。今から四十余年前、大正十四年の始であります。もう三四ヵ月後には西洋に向って旅立とうという時、父親の病気が次第に重くなり、広島で入院して病床に呻吟（しんぎん）して居りましたが、どうも寿命がありそうにもなかったのであります。その時私自身がどんな事を考えていたかと申しますと、実に言語道断な事を考えていたのであります。「どうも父親の病気は恢復しそうにもない。どうせ父親の寿命がないものならば、自分が西洋に旅立ったあとで亡くなるようでは実に困る。どうせ寿命のないものならば、旅立っ前に死に目に遇いたい。どうせない寿命なら旅立っ前になくなった方がいい」というような事を考えていた。これは実に冷たい考えであり、親不孝のどん底の考である。

そんな冷たい心持であるから父は病人であり、神経が鋭敏で感傷的である。すぐそれを感ずるのでした。私が見舞に行きますと、父はこういう風な事を言う「どうも政雄は俺の病気の事は少しも心にかけてくれない」と。それは私の急所に触れた言葉である。父から此のようなことを言われると、急所に触れられて痛いものだから申訳をしたくなる。その申訳に全く反対のことを言う。「いいえ、気にかけていないのではありません、私は気にかけて居ります。随分お父さんの病気を心にかけて居ります」と申すのでありました。今から考えて見ると実に空虚な申訳でありました。

その時私が「本当にお父さんの言われるとおり、お父さんの病気を少しも心にかけていないのでした」と言ったならば、まだしも素直な子でありましたでしょうに、私はうそを言ったのであります。「私は少しもお父さんの容体を心にかけていないのです」と言えなかったのである。空虚な言葉を口走っていたのであります。そのうちに次第に容体が悪くなりまして私が旅立っ二ヵ月前に遂に父は亡くなってしまいました。

こうなると、一体自分は父親をどんなに待遇していたかと考えずに居られない。よく考えて見ますと。形式は違っても、阿闍世王が父のビンバシャラ王を獄中に幽閉して獄死させたという、それと丁度似通ったことをしているのである。父はひどい神経痛で、床の上を少しも動くことが出来なかったので、その父を入院させた私はつまり父を獄中に押込めたようなものである。自分は冷たい心持で父に接している。それは阿闍世王と五十歩百歩の有様であると次第に思って来ました。

船が印度洋にさしかかった時、しきりに三千年前の阿闍世王の事を想い起し、三千年前の阿闍世王と今の私とがよく似通ったような心の道を辿っているのであると思った。阿闍世王の問題はよそ事ではない。今の自分の問題であるとしきりに思ったものである。

ところが又一方ではこういう風の感じがある。これは或人の打明話を聞いたのでありますが、親に対する感じは、自分は親に背き叛（そむ）いている現実の有様である、その親に背き叛いている自分を、親なればこそ自分のような者を胸におさめて下さるものであるという感じがするものだと尊敬する人から聞かされた。その感じが私の心の中に往来するのであります。結局自分は阿闍世王と五十歩百歩で、親に対して散々冷たい心を差向けた。私は阿闍世王と同じだという感じと、その冷たい私というものを、親の方からはどこ〳〵までもその御胸の中におさめて下さったものであると。こういう二つの感じが私の胸に入りみだれていたのである。

としろが斯うなって来ると、私の心持が煮えきらぬ中途半端なものでありました。つまり親に対して甘えるという心持である。自分は親に対して冷たい心、冷たい態度を持ち続けて来たが、親は有りがたいもので、冷たい心の持主である子供を見捨てず、親の方はこの冷たい自分を胸におさめて呉れるのである。こんな煮えきらない中途半端な心持であります。

昔、私が近角先生から聞かされたお話がある。それは此処に一人の放蕩息子がある。今料理屋で芸者などをあげて遊び騒いで酒に浸っている。親に背いて放蕩耽溺の生活を

している。そして「親は有りがたいもので、自分はこんな放蕩三昧の生活をしているが、親は自分に毎月々々この放蕩の費用を送ってくれる。親は有りがたいものである」と云っている。こんな事をいうその放蕩息子に親の心が届いているであろうか。それは親心が届いていないのである。それは子の方の甘え心に過ぎないのである。親心が届いたのはそうではないと先生はお話し下さった。こんな放蕩息子にどうして親の心が届くであろうか。親心が届くということはつまりどんなことであるか。

近角先生は、子は甘え心で考えているが、親の心というものは決してそんなことではないと云われました。親の心が届くというのは、その放蕩する息子の処へ親の手紙を持って、一人の真面目な友が訪ねて来て親の手紙を届ける。

「お前はこんな放蕩をして、親というものは有りがたい、こんな奴に、と云っているが、今自分が親の心を届けてやる。受取るがよい。親の心は、若し金を送ってやらねば、お前がどんな事をしでかすかわからない。若し金を届けねばどんなことになるかも知れない。ひょっとして盗みでもしては……と。親は郷里から心配して、血のにじむ金を送っているのである。乱れて行くお前を親は見て居られず、血の涙の金を送っているのである。乱れている我が子の上が哀れで哀れでたまらぬ。見捨てようとしても見捨てられぬのである。お前の放蕩三昧の生活が親の血の涙で支えられているのである。この親の手紙を見よ。」

と言って、細々と書いている父の手紙を見せる。その言葉を聞き、手紙を読んで見ると、此の時始めて親の心に気がつく。さては自分がこんな放蕩三昧をつくしているなかにも、親はどこどこまでも放蕩する自分を見捨てず、苦しみの心をもって、自分の苦しみと一つになり、一緒になって苦しみの生活をして居られたのであった、ということに目が醒める。始めて親の心はこんなものであったか、私の放蕩三昧は恥しい生活であったと、初めて慚愧の心が放蕩息子に起る。これが親心の届いた姿であると、これを繰返し〳〵近角先生が私にお話下さった事を想い起こすのであります。

私が父を亡くして、今のようなことを考えながら印度洋の波の上を渡って行く時の心持は、丁度放蕩息子が親の金を使いながら、親は有難いものだとの、親の偶像をえがいているのと一つも違いなかった。同じ事であると今思うのであります。つまり自分は親と一つになっていないという有様であった。

その証拠はどこにあるかというに、四十日の船の旅の間夢を見る、その夢はみんな父の臨終の夢ばかりであった。西洋に着いても屢々父の臨終の夢を見るのであった。浅薄

に考えると、父の臨終の夢を見るのは如何にも親孝行のようであるが、そんな夢を見るのは、実は自分は親と離ればなれであったということになる。親を向うに見ていたのである。親は斯様々々であろうと考えて見るのである。私は父を亡くしてから一年余りは父の幽霊がついていては現れて見えるという有様であった。親の幽霊につかれていたのであったかと思う。こんな親の幽霊がつきまとっているのは一種の幻の生活である。

問題は親の幻がつきまとっているのではなく、幽霊から憑かれているというような境地から飛び離れて、自分と親とがしっくりとなった一緒の生活に来なければ宗教の世界ではないのである。

いよいよ親と子と一つになるというのは、親と子という間隙はなくなって、親だ〳〵とさえも言わなくなるのである。それは斯うである。それは永い間親の幽霊につきまとわれていた私が最後に親の幽霊から放たれることになりましたのは、自分の心の中に動く親への甘え心、即ち自分は親に対する甘え心ばかりで動いている。ことに気がつき始めてから、初めて一筋の親心、唯一筋の親心がすべての働きとなって現れ、その親心の中に動かされて行くことに気がついて参りましたのであります。

親と子という問題は、親子が対立しているとか、対面しているのではなく、子が親の中にある、つまり子が親に対して「お父さん、なつかしい」と言うのではまだ〳〵余裕がある。なつかしいとか、有難いとかの言葉をさしはさむ余地のない親の心の中における我が生命の動きという事になるのである。

或る人は、自分の子供に対して一事一事について、親に対して「有難うございました」と言わせようとする人もあります。よほど以前のことでありますが、私の子供がそんな先生のお話を聞いて、或る日のこと私の前にあらたまって、「お父さん、有難うございます」と申しましたことがある。子供から改って有難うと言われると、私のような者は、いかにも親子の間にへだてが出来たような感じがします。親子の間は有難うも言わない、間髪を入れない、しっくりした間柄である。有難うと殊更に入れるところに、親と子の間に離れ目が出来ているのである。

これは少し切り込んだ問題になりますが、私ども浄土真宗のお話を聞かされ、親鸞聖人の教の道を辿る者が教えられる事は、真宗の教義により、お念仏は言わば、子供が親に対して有難うございますというような感謝の声であり、報謝の念仏であると教えられるのであります。実際そうだその通りだとは思いますが、併し、若しも私が今更らしく事だてて報謝の念仏を営んで居りますと考えることはどう

でありましようか。それは報謝の念仏とは言いながら、他人行儀の念仏になっているのではあるまいか、念仏申しながら隔たって居るのであります。

念仏はどこ〳〵までも親心唯一つのお働きである。私が久遠の御親に対して報謝する考えの上から出る念仏でなくどこどこまでも親のはたらきで、親のいのちから出て私のいのちに響く声であります。その時、私の方から言えば、有難うとさえも思っていない。そこに親心唯一つがはたらいて、その親心の中に私が動いている。こういうことであります。

（昭和四十五年二月十三日稿）

「浮藻」　わが娘一周忌

（伊藤左千夫歌集）

み仏と変りし御名をささげ持ち　吾がにひ室（むろ）にうつしまつりぬ

禍の池はうづめて無しと云へど　浮藻（うきも）のみだれ目を去らずあり

今日の日の夕ぐれ時と思ひくればつめたき骸（から）のありありと見ゆ

濁水の池を八十（やそ）たび悔ひめぐり歎きみしかど履物（はきもの）もなき

去歳（こぞ）の今日泣きしが如く思ひきり泣かばよけむを胸のすべなさ

人くれば人と笑ひてありといへど亡き児しのぶにわが胸痛し

汝（な）を歎くもの外になしいきの限り汝を恋ひまもるこの父と母と

歎異抄の愚考（一）

杉藤　美代子

故・大字佐平治氏のことばにより発心し、歎異抄の愚考を私なりに書きはじめます。その第一条は、入門としては少々むずかしいので、第二条からはじめます。

歎異抄は、高等学校の「古典」の教科書にもその一節が載っていますが、果して現代に生きる叡智に満ちたことばとして生従に受け取ってもらえているでしょうか。

きようから少しずつ口語訳をし、近角先生の思想と思われるもの、それを私なりにいただいた形で書きつづっていこうとしています。

歎異抄についてはすぐれた注釈、解釈の本がたくさんあります。現に私の手元にも「歎異抄入門、親鸞と現代」（歎異抄研究会編、教養文庫）それから同名の「歎異抄入門、この乱世を生き抜くための知恵」本多顕彰、「親鸞」笠原一男氏、また同名の著亀井勝一郎氏があり、それぞれまことにすぐれたものと思われます。

然し私の書こうとするものは、これらに及びもつかぬ、無知文盲の徒のしごとです。親鸞聖人は、無学文盲、罪悪深重のものをこそ救済せんとのお心であられたこととて、私なりの思いを、ともかく、つづつて参ります。

第二条　（口語訳その一）

みなさんは、それぞれ多くの国々（十余ケ国とは関東から京都へ上る途中の国々、常陸、下総、武蔵、相模、伊豆駿河、遠江、三河、尾張、伊勢、近江、山城を数えたものと思われる）の国ざかいを越えて、まことに危険な所を通り命がけで、この親鸞をたずねておいでくださる、そのお気持ちは、ただただ、極楽往生をするにはどうすればよいか（そしてそれが、本当に生きる力の根源となる信心を得るにはどうすればよいのか）そこを問い聞こうというのが目的であります。

然し、もし皆さんが、なむあみだぶつと　唱える「念仏」より外に往生の方法があると親鸞は知っているのであ

ろう、又、教義を書いた書物などをも知っていて教えてくれるだろうと、それを何とかして知りたにものだとお思いになってここまでいらっしゃったものとすれば、それは大まちがいなのです。もし、そうお考えならば、奈良の寺々や比叡山延暦寺等にも立派な学僧たちがたくさんいらっしやることですから、そういう方々にもお会い申しあげて、往生の大切な要点を十分にお聞きになるべきです。

親鸞はといえば「ただただ理屈ぬきに南無阿弥陀仏と念仏し仏さまの絶大な救済のお力におすがりしておたすけいただきなさい」と、私の心から信頼申しあげる立派なお方、法然上人の仰せられたそのおことばをいただいて、そう信じるより外に、別の理由も理屈もないのです。

（解説　その一）

関東、常陸の国（茨城県）稲田を中心に、親鸞聖人の二十四輩と呼ばれるお弟子の方々のお寺が今も残っているそうですが、「愚禿親鸞」と自ら称されたこのすぐれたお方は越後での流罪生活の後、この稲田で念仏の教えを説かれました。当時関東の底辺にある農民漁民らの間に、この教えは広く深くしみわたっていきました。「念仏一つ」ということが、権力に抑えつけられてつらい暮しの中にあった人々の人生にどれほどの力となっていったか、今日の私どもの想像以上のものがあろうと思われます。

この教えに対する京都でのかっての圧迫が、かの流罪となったわけで、そのため法然上人は四国へ、親鸞聖人は越後へ送られました。僧の身分を剝奪され、聖人は流人としてそこで四年を過ごされたわけでしたが、この関東でも、この念仏者への迫害は、はなはだしいものがあったようです。

然しこの教えは当時の無気力な人々の心に灯をともし、それはやがて全国に広がる力となっていきました。

晩年に聖人は京都に単身帰られます。二十年間布教された関東を去られたことは、再び弾圧され布教の許されぬ状況からのがれられたものと思われます。聖人は六十三歳でした。そのいきさつについては、笠原一男著「親鸞」にくわしい考察がなされています。

聖人の去られた後、関東の人々の聖人を慕う心は、察するに余りあります。それにこの「念仏一つ」という教義への疑問、教義の中心点から外れていく者への疑い、しかも当時の人々の心には偉大な聖人以外自分を救ってくださる方のないことは明らかであったでしょう。人々は書状を送り、又は物やお金をお送り申した者もあるし、又遠路をものともせず、お会いしたさに上京する者もありました、その旅路はいわば必死のものでした。危険をおかしての旅、

その苦労、切実な思い、それらを重々知っていてしかも聖人は一見、そつけなく、学問としての教義を知りたければ奈良や比叡山に行ったらよい、そこには立派な学者たちが居られるからその方々に聞くがよいと云われます。その「学者」方の弾圧ゆえに、かって聖人は流罪のうき目にあわれました。「学問としての教義を知りたければその学者方にお聞きなさい」これは皮肉でも何でもない淡々としたおことばでありましょう。聖人は学問としての教義を学ぶことで往生極楽の道、真の信仰がわかるものではないということを身をもって経験された方です。

しかも、聖人は、後に「親鸞は弟子一人も持たずそうろう」とのべて居られます。してみれば、前述の二十四輩ということばも聖人の意に反することばでありましょう。聖人自身は、信仰というものを、自らのはからいで学びとるという考え方を否定します。それは、弥陀の方からさす光明に気づくことであるからです。

滋賀県虎姫駅からバスで三十分も田舎道を行くと、近角先生のお生れになった西源寺があります。今はお留守番だけ、ごく古びた普通の、然し土地柄にしては大きいお寺です、今から二十年近い前でしょうか、私どもは二人でそこへ出向いたことがあります。それは今は亡き近角常音先生が、報恩講（親鸞聖人法要）にお帰りになったときの伺ったものです。お寺の近くの農家に二泊されていただき、お寺に通ってお話を伺いました。今はその農家のご苗字も忘れてしまいましたが、その家族の人々の態度、生活ぶりこそ「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」との近角常観、常音の両先生によるお導きそのもののくらしであると今もなお思います。その家だけではありません、お寺へ次々に参って何かとお世話申しあげ、又はお話を伺うその人々の、素朴そのものの態度は、私は今まで他の土地で見聞きしたものとちがう、静かで明るく、いぶし銀のような喜びを底に持った、しかも素朴な農民の姿でした。

その昔、近角常観先生が、ドイツ留学より帰られ、本郷東大前の森川町に求道会館を建てられお説法をされ、そのあとを弟様の常音先生が継がれましたから、近江のご自坊は年に一、二回のご帰坊であったと思われますが、その村へのご教化のほどは絶大なものがあります。

そういう農家の人々の前に、私どもは恥じ入る外ない。いささかの学問、文明文化のにおいなんていうものが、どんなにあさはかな根なしぐさの如きものであるか。それは学問なんて呼べるものなんかでもない、人間の基底に根ざす本質的な心、そこにひびいた信心でなければ——「学問をしたければ、比叡山なり奈良の寺々なりに……」と言わ

智慧

れた聖人の心はそこだろうと恥じ入るのであります。

あらためて思います。「知恵」と「知識」とはちがうのであります、学問で得るもの、それは多く知識です。知恵とは、叡智とは、それこそ「弥陀にたまわりたる知恵」なんです。この「知恵」は、本人が自覚すると否とは別にして、信仰と気づかない人の中にも時に光るのを見ることがあります。その光りこそ、この世の「ほんもの」でありましょう。

但し、これを一概に学問軽視と見るのは誤りでもあります。聖人は大へんな、勉強家、努力家、経典を読みあさりいくら努力しても教義の奥所にふれえないのに悩みくるしみ、その結果が、法然上人との出あいとなりました。たしか聖人二十九歳の頃と思います、そこを通って来られたうえで、念仏一つにおちつかれた、それは一つのまわり道である。しかしそれはやがて親鸞聖人説法の裏にかがやくことになります。

話は変りますが、湯川秀樹氏の随筆の中に光る素朴なもの、現代の知識の最高に立つ氏の敬虔な感覚、そこに気づく方は多いと思います。最高峯の科学者の脳裏にあるものそれは、単なる知識でなく知恵であるように思います。それは数学者岡潔氏の文や朝永振一郎氏の文のすなおさにも通ずるところのあるものです。彼らは現代科学のゆきつく限界を知る知恵を裏にもっての探求という本質にとどいて居られるものと思います。

想像ですが、この人達が、もしも西源寺の素朴な農家の人と語られることがあるとしたら、その人々の持つ「何か」にふれるものがあると感じられます。

学問の片はしをかじつて、われこそはと力む私ども中途はんぱなものとのへだたりをそこに感じるのです。

親鸞聖人の「往生極楽への道は、念仏以外にない」との喝破は、大へんなものであります。「学問のある人、学問の出来る人、自力で釈尊のたどられた道の歩ける人、そういう方々はどうかその道を歩いてください（皮肉でも何でもなく）然し、私（聖人）の、心からわかっていること、それは私（聖人）が考えたものでも何でもない。信心の智恵の方、ほんとうに光り輝く叡智をもったお方（法然さま）が〃念仏よりほかにないのだ〃と仰せられた、そこをすなおに信じる以外どうして見ようもないということが心から受けとられるからだ」と仰せられたこと、ここに信仰というものの本質があります。

なぜなら「信仰」とは「ここに仏があるから」という実在、実証ではなく「信ずること」であるからです。

又、この条の重要な点は、信仰というものを「わかる、わからない」ということばで区別し、理知で理解するとする向きがある。それに対する警告とも云える点です。特に仏教に縁のある人が、経典などを相当に読み、わかる——と思う——もっと読んだらわかるだろう、こうしたら頭で理解できるだろうと、こう自我をふりたてる。知識の線でわかるわからぬときめようとする。それは、遠まわり、いや、ぐるぐるまわって同じところを歩く結果になりかねないからです。信心は「理性のものではなく感性」のものだからです。

「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とは、絶対の信心であります。「このくらいわかったから」とか「私のは間ちがっていない」とか「これでもいいんだろうか」とか、そういう相対的なもの、他のものと比べて、「私の信心は？」とこう「考える」態のものではないのであります。

「南無阿弥陀仏と念仏すればお助けくださる」ということばをそのままるごとで赤子の心で受けとること——「いたたく」とこれを言いますが——そのことをいうのです。然し、赤子ではない私達はなかなかそれを丸ごといただけないんです。それについて日を追って書かしてもらいましょう。

笈（おい）の小文

芭蕉翁

……狂句に心ひかれて、ある時は倦みて放擲（ほうてき）せんことを思い、ある時は進んで人に勝たんことをほこり是非胸中に戰うてこれがために身安からず、暫く身を立てんことを願えどもこれがためにさえられ、暫く学んで愚を曉（さと）らんことを思えどもこれがために破られ、終に無能無芸にして、ただこの一筋につながる。西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利久が茶におけるその貫通するものは一なり。

しかも風雅におけるもの、造化に随いて四時を友とす。見るところ花にあらずということなし、思うところ月にあらずということなし。像（かたち）花にあらざる時は鳥獣に類す。夷狄（いてき）にひとし、心花にあらざる時は鳥獣に類す。夷狄を出で、鳥獣をはなれて、造化にしたがい、造化に帰れとなり。

〈風羅坊と号す。うすものの芭芭の如く風に破れ易し〉

『癌の宣告の可否論』

花田正夫

昭和四十四年九月、新潟医大で日本ガン治療学会の第七回総会が開かれてその最終日に「ガン患者に知らしむべきか」の論題で、医師、医事評論家、宗教家など五人の意見が出て、深刻な問題だけに熱心な討論があった。

この企画者である新潟大学の堺哲郎教授は、その趣旨を「自身で手がけた手術経験から、ガン患者に対して病の宣告をすることは、医師として治療がしやすくなるが、患者の立場からは大変な苦痛になることだから、この問題について話合いたい……」

と述べて、司会せられた。

医事評論家の水野肇氏は

「僕は宣告すべきじゃないと思う。早期ガンでさえ全部は治し得ない医学の現状なのに、なぜ宣告せなければならないのか。ガンは全身病だから精神力が大いに左右する、宣告するとしないで生きのびる期間が大変な差である。宣告を受けて半狂乱になった患者の心をだれが救うのか。うすうすガンだと思っているのと、はっきりガンと宣告されるのとは大違いだ。人間は最後まで、どこかに逃道が必要なのではないか……」

と結論した。

ガンの内科学の権威者の黒川利雄ガン研付属病院長は

「いまのガン治療の水準を考えると、患者への宣告はよほど慎重にしなければならぬ。患者に知らせて治療に協力して貰うことは一番いいのだが、それの病状や患者の心状による……。私自身ガンになった時、病名を知らされるのがよいのかどうか、実際になってみないと何とも云えない……」

と慎重であった。

次に国立ガンセンターの久留勝院長は、喉頭ガンで亡くなった池田前首相の主治医であったが

「自分ではガンだと思っていても、医師からはそうじゃないと云って貰いたい――これが共通した人間の心理だと思う。

池田さんがガンになった時も、発表の仕方をいろいろ考えて、前ガン状態と発表した。米国では不治のガンでも患者に告げるようだが、私は手術後五年以上たった人には、もう大丈夫だと教えるが、それ以上はいわない。医学と医術は別だから……」

という立場である。宗教家はキリスト教と仏教から代表者の意見が出たが、条件つき肯定論であった。

さて会長の堺教授はその前年十一月に「からだの調子が悪い」と訴えて入院、その時弟子たちが胃ガンをつきとめ手術をしたが、教授には胃カイヨウと伝え、手術の回復を待って普通の生活にもどり、治療学会の会長としての大任をはたした。その翌日、急に変調を訴え、三十日に亡くなった。教授の弟子にあたる大森助教授や医局員は「教授が専門家であるのに、それをかくすには非常な苦労が要った他の患者のレントゲン写真をお見せするなど大変だったが教授自身がガンであることに気づかないで、大任を果たされたことは、学会のためにも、本人のためにもよろこぶ半面、いつ教授が気づかれるか、知らせるべきかなどで、とても複雑な心境であった」とのことである。

以上は昨年の出来ごとであるが、患者にガンを知らせるべきか、知らせてはいけないかという問題は医師にとっては大変な問題である。告げられたことによって、自分のなすべき仕事を完うしてやすらかに逝かれた人もあるが、私の親しい医師の話では、知合いの僧侶が胃ガンになったところが本人が、自分は仏法者であるから覚悟は出来ているから、正直に知らせてくれとのことで、そのまま告げるとそれが大きなショックになって急に衰弱して死んだ、それ以来、知らさないことにしている、とのことである。このような結果もあるので、一概に定め難いことは当然であって結論は出るはずがない。タゴールの詩に

何故にともしびは消えた
何故にともしびは消えた
お前を風からふせいでやろうと
マントでお前をおおうてやったのに
何故にともしびは消えた

というのがある。ましてこうした深刻な問題は、人間のもつ単なる善意や常識では解決は出来ないことである。歎異鈔に

「聖人（親鸞）の仰せには、善悪の二つ総じてもて存知せざるなり。その故は如来の御心に善しと思召すほどに知りとおしたらばこそ善きを知りたるにてあらめ、如来

の悪しと思召すほどに知りとおしたらばこそ悪しさを知りたるにてあらめど、煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界はよろずのことみなもてそらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」

とあるが、これが、真剣に考える時、誰しも行きあたる厚い壁であり、そこにあたえられる仏智による解決の道がある。

ここで短刀直入に結論から申せば、そうした患者を受持っ医師自身が、不治のガンにかかっても、それによって行きつまらない道を体得してもらいたいという一事である。

ある医師から「死期の見えた患者を受持っているが、それぞれの対症の療法は施すけれど、患者にあうのが心苦しくてならぬ、どうしたらよいだろうか？」と訴えられたことがある。人情としてはもっとものことであるけれども、結局は医師自身が、その不治の病によって失わぬ心のともしびを得るか否かが根本の問題で、それさえ見出していればおのずから処すべき道もひらけよう。「波間道無く、道縦横」とはこの心境を云われたものである。

このことは治療にあたる医師ばかりでない、そういう重病人を持った家族にしても同様である。そうした近親の者の病気を機縁として、自分自身が真実のひかりを見出すこと以外に根本の解決はない。千里の彼方で暴風にただよう帆船をこちらで静めることは不可能であるが、この如何ともすることの出来ぬ自分自身の救済を得る道はひらかれている。歎異鈔の四章に

「慈悲に聖道、浄土のかわりめあり。聖道の慈悲というは、もの（人）をあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれどもおもうがごとくたすけとぐることときわめてありがたし」

と、限りある人間同志の智恵や同情ではどうにもならぬ厚い壁にぶつかってしまうのであるが、ここに

「また浄土の慈悲というは、念仏していそぎ仏になりて大慈大悲心をもておもうがごとく衆生を利益するをいうべきなり」

と、この如何ともなし得ぬ身を仏がかねてからよく知ろしめして、大悲の至極の名号を廻向して下さり、凡夫がすみやかに成仏させて頂く力強いいのち綱を恵まれることによって、自然に行くべき道、処すべき術も見出される。

京都時代からの念仏の友の故・林田英夫さんが、医師となってほどなく母堂が胃ガンで療養の甲斐もなく亡くなった時、「医師として、子として不治の病の母を持って堪えがたいものがあったが、そこによき人、親鸞聖人のこの四章の声がひびいてきて、ただ念仏のまことに支えられ最後

までみとることが出来た。幸い母も念仏してくれ、生かせたくてもどうすることも出来ぬ者、生きたくても生きられぬ者同志が、お念仏の中に永遠の手を結んでお別れを惜しみ合いながらすごせた」と語って、

「今生いかにいとおし、ふびんとおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏申すのみぞすえとおりたる大慈悲心にてそうろうべきと、云々」

の四章の結びの言葉を、文字通りに信味させて頂いたと深い感動をもって告げてくれた。

この林田さんの場合、かねて歎異鈔をくり返しまきかえし読んでいたのが、母堂の重病を縁として、医学と人間の能力の限界の谷間に立って、そこに聖人の真意にふれ、弥陀仏の不滅のひかりを仰いだのであった。

医師や看病人が、このように自分自身の救いの光明をえさせて貰う、よしんばそうした道をえられないまでも、その道に近づかしていただくことが、この問題解決の焦点である。

私自身、四十余年前、医学生だった頃、当時不治とされていたハンセン氏病患者に接し、医学も何の力とならず、人間同志の親切も無力になった。その時、自分自身が同じ病患に罹った時どうすればよいのか、不治にしてあらゆる人々の彼方にひとり消えて行かねばならぬ身に、不滅の光はないものであろうか、自分にそれが見つかっておれば、自分がどうしてあけられなくても、共々にその不滅の光に導かれて行くことが出来ように、と痛感した。このことは私の求道途上の大きな指標となった。

つづまるところ、自分自身の救いを見出すことが、一切の道のひらける根本である。このことをのけて、是非を論じても、袋街のどうどう廻りに終るであろう。

聖徳太子は、文化の低調な日本に、女帝推古の御代に御年二十で摂政の大任を背負われて、横暴を極める蘇我氏と共に、国政を担当せられた。しかも蘇我氏は太子の叔父君の崇俊帝を殺害し、物部氏を滅亡させて、天下を我物顔に振舞うのであった。それに加えて三韓は常に反乱を企てその治安の術も見当らぬという、内外共に大暗黒の世に処し玉うて遂に、御自からの開眼を求めて、三韓から渡来の恵慈（えじ）法師を師として、勝鬘経、維摩経、法華経を身読（しんどく）され、おそらくは三十頃にその真意を体得せられている。

そして、冠位十二階を定めて、人材登用の道をひらかれ、次に十七憲法を制定せられて、国是を定め、更に、随

唐に留学生を派遣して、大陸文化を招来されるという大事業をはじめられたが、惜しいことには疫病のため四十九歳という御働き盛りに急逝せられた。

この太子が、

「篤く三宝を敬え。三宝は仏・法・僧なり。則ち四生の終帰（しゅうき）、万国の極宗（ごくしゅう）なり。いずれの世、いずれの人かこの法（みのり）を貴ばざる。人はなはだ悪しきものすくなし、能（よ）く教うるをもて従いぬ。それ三宝に帰しまつらずば、何をもってか枉（まが）れるを直（なお）うせん」

と、時代をこえ、民族国境を問わず、生きとし生けるもののついのよるべであり、国という国のよって立つ大道を勧められて、この真実をまかす極悪人もなく、またこのまことによらなければ、自分自身が正しい道に帰らせていただくことは至難である、と、金剛の信を樹立せられた太子の悲心切々としたお呼びかけである。

この太子の常持語は、世間虚仮（せけんこけ）、唯仏是真（ゆいぶつぜしん）、の一句であった。虚仮の世、そらごとたわごと、まことあることなき身をかねてしろしめして、それが可哀想と、無限の智慧と慈悲のみこころにおさめ、とかして下さることのかたじけなさを讃仰せられている。

幸にも、太子や聖人のみ教のただようておる日本に生をうけた者として、一刻もはやくみこころを我身に受けて、唯一のあかりを頂きたいものである。

昭和四五年一月末日。

パスカルの言葉

人間は生れながらにして信じ易く、疑い深く、臆病であると共に大胆である。故に人間は本来矛盾的存在であるといえる。この矛盾した身の頭から足先まで私欲私情がギッシリ詰っている。この私欲的存在は例外なしに幸福を追求している。そして幸福を見出すとしばらくこれを楽しむがそれに飽いて、他の幸福を求めだすのである。人間のこの移り気は次の原因による。人間は現在の楽しみをつまらぬものだと思う。然しまだ味って見ない楽しみのつまらないことを知らぬ、これが移り気の生ずる理由である。人間はこの移り気から新しい幸福を転々として求めながら少しも満足することが出来ぬから、遂に倦怠におちいる。

倦怠ほど人間にとって堪え難いものはない。何等の情熱もなく仕事もなく、気晴らしもなく、完全に休んでいる時ぐらい苦しいことはない。この退屈に苦しむ時こそ人間はしみじみ自分の無能なこと、人から見捨てられたことを感ずる。すると憂鬱と絶望に打ち沈むのである。そこで慰安や気晴らしを求める。賭博や猟をしたりするのも気晴らしのためで、決して兎を捕ったり、金を儲けたりすることが主眼ではない。その気晴らしのために知らず識らず自滅の道をたどるのである。

法信抄

……私の母は現在八十八をむかえ元気で居りますが私とは正反対の性格で、何もよく行きとどく人で、今でも私よりずっとよく気が付いて少しも年をとったとは思えない程でして感心しております。

私は二十一の時、頭の病気で半年ばかり世の中のことも知らずに暮した親不孝者でございます。今私が子供のことで苦労いたしますのも不思議ではないのです。みんな私の蒔いた種が生えてきているのです。

お寺のとなりに生れて、子供の時から近角先生のお話を聞いていたものでございますが、何時か先生に大変しかられたことがございます。それは、

「子供の時から悪いことをしてはいかんぞと母に教えられて育ちまして、自分は悪い事をいたしません。罪の深いことがわかりません」

と申しましたら、

「わからん者はよけい罪が深いのや」

と言われました。それから自分をかえりみますと、母の言われたことが出来ませんものですから、非常に苦しみまして、これからさきが思われて、東京の先生へ手紙を出してお尋ねしたことがありました。その御返事には

「よくわかりました。あんたの心配していることはもっともことで、親の言うことのきけない、して見様のないあんたを、唯御一人の方だけが、どこまでもあなたの味方になって下されてお見捨てない、そのお慈悲をいただきなさい」

と細々と真筆をもって教えて下さいました。今も大切に残して居ります。この御親切なお手紙を頂きながらも私はなお心にひびくことなく親不孝を続けて参りました。鏡にうつるように今娘が私の姿を見せてくれるように思いますしぶとい私は何十年の年月を無駄に過ごし、頭は白く腰は曲り、行く先みじかくなった今、ようやく、自分の姿を見出しました。ある時、常音先生は私の顔を見すえて

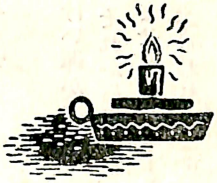
「唯御一人の方だけがどこまでもあなたの味方になって下される」

と言われましたお顔が、今新しく頭に浮ばれて、今日の私もなおじっとみつめて下さる思いがいたします。……この上はお慈悲にすがりおまかせするより外ございません、ありがとうございました。

☆☆☆☆☆

某信女

あとがき



陽春の光をうけて、草木も小鳥も嬉々としておりますが若い人々には、試験、入学卒業、就職と目まぐるしい忙しさであります。前途に幸あれと願ってやみませんが、現在の日本はきびしい風が吹きまくっております。

「自照」誌によりますと、京都の某高校の生徒が数人もすでに自殺した由、なお京都大学の全共闘派の学生の自殺は学園紛争以来十名に及ぶとのことであります。これはひとり京都だけでなく、全国的に繰返されている痛ましい現実であります。

さて私共の年配の者は、明治の中頃「人生不可解」と遺言して華厳の滝に投身した藤村操青年の記憶は深刻でありますが、また敗戦後の物心両面の大混乱時に、高校や大学で若者の自殺が続出しましたことは記憶にあらたであります。しかも現在の上記の悲惨事を聞くにつけ、表面に拾いあげられる原因は種々あるにしても、それは生きている人、そして生を願う者の眼にうつる推則で必ずしも正鵠を得たものとは云えますまい。

こうした時、近角先生の『人生と信仰』に掲げられている「人生問題と信仰」を今回いただきました。次号に「悲観思想と信仰」をも頂いて、慈光を仰いで人生を直視したいと願っています。

福島先生の「親子一如」のお原稿は、先生が三十年前から手をつけて居られた「日本家庭史と教育」という著書を脱稿された早々に、執筆して下さったのであります。古聖も「仏心と凡心と一つになるところをさして信心とはいわるるなり」といわれましたが、その妙諦をお述べ下さいました。

杉藤さんは近角先生のお導きをうけられた方で「歎異抄の愚考」は、時々お母堂様に送られたものを頂きました。

「ガン宣告の可否論」への私考は、昨年の北陸でのガン学会の記録を読み、私自身に感じますままを述べました。現在知人で不治のガン病で病床にある方々も多く、ひとごとならず感じますことであります。

新刊書紹介

力の限界　（自然科学と宗教）東昇著

発行所、京都市下京区正面烏丸東、法蔵館

定価、四五〇円。振替、京都二七四三番

（註）著者は京大医学部教授。電子顕微鏡学会長、ウイルス学会長等を歴任。池山栄吉先生により歎異抄への開眼をうく。

御案内

○毎月第一、二、三日曜、午后一時半　一道会例会

南区駅上町二ノ八八。市電、新郊通一丁目下車

○毎月二十四日。午前午後。教西寺　法話会

昭和区小桜町。市電、御器所通り下車　市バス、北山町下車

慈光第二十二巻　第三号　昭和四十五年三月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十日　第三種郵便物認可

定価　半年　二百五十円（送共）
一年　五百円（送共）

名古屋市南区駅上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　吉野穂志郎

名古屋市南区駅上町二ノ八八
発行所　慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七